

ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』 早稲田写本におけるペアワードー「 sacrament 」の章

青木 繁博

Word Pairs in “De Sacramento” in Waseda MS (NE3691)

Shigehiro Aoki

筆者は過去に『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』の「金曜日」の章について、そこに見られる「ペアワード」表現を考察した¹⁾。本稿においては「 sacrament 」の章を用い、中世英語におけるペアワードの様相や機能・役割等についてさらなる考察を加えたいと思う。

「ペアワード」の用語と、これまでになされた研究に関して

中世英語において頻繁に用いられる、いわゆる“ word pairs ”の表現については、これまでも多くの研究がなされてきた。しかしながら研究者によって、その定義や何を研究の範囲とするかは様々である。

古くから言われてきた“ word pairs ”とは、ペアの要素である語同士の意味が同じもの、すなわち synonymic pairs²⁾である。実際、同意語からなり意味的には何ら付け加えるところがないと思われる組み合わせが頻発すること自体が現代英語とは大きく異なる点であり、この現象に着目する契機となったという経緯を暗示するものと言えよう。こうした見方は instructive、すなわち、新奇な語（ラテン・フランス語源）に馴染みのある語（古英語から伝わる語）を併置し、前者の意味を説明するために用いられた表現だとする機能解釈に結び付く。この図式は確かに多くのケースに当てはまり、渡辺³⁾は同種の表現を「翻訳説明的対句」とし、外国語教育の一環としての役割を指摘している。

しかしながら、完全に同意語なのか、それとも類義語なのかという問題は残る。Leisi⁴⁾は、用語を die tautologischen Wortpaare とし、ひとまずは語自体よりも読者への効果（冗長的と感じるのは他でもない読み手の側である）に重点を置き、上述の意味論的問題を回避した。その機能・役割については、ペアとして組み合わせられた単語同士の関係を詳細に分析し、強調の効果をもたらすものと位置付けた。用語としては Stone⁵⁾も同様の tautologically paired word という語を使用している。

Koskeniemi(1968, 1975)⁶⁾は、同意語・類義語からなる組み合わせ以外のペアも頻出することを強調した。こうした同意語的ではないペアをも考察の範囲に体系的に含めるべく、その用語は repetitive word pairs、すなわちペアの最大の特徴は同意語的かという意味の問題ではなく、その頻度にあるとした。その中でも同意語的なペアは“ nearly synonymous ”という条件付きながら以前からの見解を継承、それ以外の換喩的表現のペアや反意語からなるペア等も、一つの大きな枠の中に収められた。その後

Koskenniemi(1983)⁷⁾では用語は binomials となった。これは Malkiel⁸⁾が現代英語の中にある類似の表現について論じた際の用語に準じたものと考えられ、その主な研究対象は中世英語と現代英語とで異なるが、両者には共通する部分も多いと思われる。

かくして「意味が同じ」ということで着目されたペアワードだが、その範囲を広げ、むしろペアワード内の単語の意味的关系を究明し、その表現が担う役割を考察する、といった方向へと変化していった感がある。

以上のようなペアワード研究の歴史からも、この表現技法の定義付けおよび対象の取り方の難しさが窺われる。本稿ではこうした表現を「ペアワード」あるいは単に「ペア」と呼び、「関連性のある語が、何らかの機能・効果のために結び付けられた表現技法」とし、Koskenniemi(1968, 1975) 同様に対象を広く取り、様々なペアが持つ機能や文中で果たす役割等について考察したいと思う。

テキスト、特殊文字の表記法、引用箇所の表記等について

以下、ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』早稲田写本の「 sacrament」の章におけるペアワードを考察していくが、底本については、特に注釈がない限りは写本の転写 (Oguro, Shoichi and Shigehiro Aoki, eds. “*De Sacramento*” in *Waseda MS (NE3691)*, Waseda, 2000) を用いている。

ただし特殊文字については、様々な技術的な問題を回避するため、

b (thorn) 7

にて代用している。

また、ページ・行等の表記については、例えば

157rL3: (folio 157 recto Left Column 3rd line)

158vR34: (folio 158 verso Right Column 34th line)

となっている。

ペアワードの形態と音韻について

ペアワードは and (& を含む) や or でもって結合されているものだが、 sacrament の章においては or 等がペアワード的に用いられた適切な例は見つからなかったため、and によるものに限られている。全体については、末尾のリストを参照されたい。

なお、ペアワード表現において、and が用いられているものと & が用いられているものに違いがあ

るのかという疑問はある。それについては、当テキストのみならず、中世英語の多くのテキストに渡って精細な研究を行う必要があり、現時点では明確な答えは出せないものと考えられる。

ただし早稲田写本・ sacrament の章に限って言うならば、 and と & の2種の表記法は、意味内容の変化を伴うものではないように思われる。

sacrament の章、ラテン語の箇所を除いて用いられた & の出現状況（ペアワードで使用されたかどうかは問わない）を見ると、全23例のうち実に22例が行末にて使用されている。

156vR33	veilous resurrexion &
157rL3	the merveilous werkes &
157rL19	ly goost aboue kynde &
158vL1	he vnable to receyve & ⁹⁾
158vR34	holy chirche techeth &
159rL34	good wille to god &
160rR3	And if it be broken &
160rR22	fore it is gret folye &
161vL4	goostly confortd &
161vL25	riche I charge the &
162rR8	shal be confermed &
164rL13	and goostly blynde &
164rR11	mynable synner &
164rR20	ranne out therof &
164rR23	turned into flessh &
164rR27	was al astonyed &
166vR30	the kinge of heuene &
167vL5	ly to trewe bileue &
168rL17	bodye ¶ ¹⁰⁾ So Antecrist &
169vL19	getinge of vertues &
170rR23	the fire of thi loue &
170rR24	my hope confortd &

行末ではないでないものはわずかに1例のみ。ただしこの例についても、そのページの最終行（右のコラムの第34行目）である点を指摘したい。

159rR34 kyndelinge & norshinge

このように & の分布に偏りが生じているのは、行末（あるいはページの末尾、もしくはその両方）に and が来た場合、残りのスペースを計算しつつ、それを節約するために短い形態を用いたという写筆の際の至極現実的な要求があったためではないかと推測される。少なくとも sacrament の章においてはこのような解釈が成り立ち、and と & の違いは意味内容に関するものではないと考えられる¹¹⁾。以上のことから、本稿ではペアワードという観点から見る場合 and と & とを同等に扱うものとする。

ペアワードの形として最も基本的と考えられるものは、

162rL33-34 pobilshed and knowen
164vR9-10 publisshed and knowen

157rL3-4 werkes & dedis
157rL25-26 werkes and dedes
170rR14-15 werkes and dedys

160rL23-24 fully and holy
165rL14-15 hoolly and fully

167vR6 tormentes and peynes
167vR10-11 tormentes and peynes

以上の例でも見られるような、

[単語 1] and [単語 2]

の形である。

しかしながら、その形は崩しながらも、これらのペアと同等とみなすことができる語順もある。いくつかの傾向が認められるので、整理しておきたい。

前置詞によって分けられている名詞

157rL34 in spirit and in herte
157vR8-9 of vertues and of grace

それぞれが、同一の事物を指す目的語を伴う動詞

158rR15-16 taken it and eten it
165rR14-16 stableth hem and strengthes hem
168vL19-20 repreued it and scorned it
168vR32-33 strenght vs and stable vs

副詞（この場合は so）により、語順が変化しているもの

161rR23-24 grete and so worthi a sight

形容詞と名詞の組み合わせ、「[形容詞 1] [名詞] and [形容詞 2]」

160vR9-10 bodely meschief and goostly
165rR27-28 bodely meschief and goostly

また以下の例では、1語に対して複数の語がペアとなっている。

163rR19-20 consecrate and made god
164vR6-7 assoilled me and lete me go

同意語的なペアワードの役割として、新奇な語の馴染みのある語での説明が挙げられていることはすでに述べたが、古くからある語で1語では説明するに適切なものがない場合、あるいはまったく新しい概念を表す語が導入された場合には、複数の語句で説明にあたるのは妥当なことであると言える。これらの例はそうした事情が反映されたものと思われ、語句としての繋がりは緊密とは言えないが、機能面のみに着目すれば、同意語的なペアと同等の役割を果たしていると考えられる。

これまでは単語レベルで語られることが多かったペアワードではあるが、実際には単語 - 単語の組み合わせ以外に、単語 - 語句、語句 - 語句の組み合わせで成り立っていると考えられるペアをどう捉えるかが大きな問題となってくる。本稿においてはその意味内容や本文中で担っていると考えられる役割等を考慮して、語句からなるペアについても考察の対象としている。ただし、こうした語句からなるペアをペアワード表現全体の中でどのように位置付け、単語のみのペアとの共通点・相違点を探るといった数々の課題については、今後さらなる研究が必要なものと考えている。

ペアワードに関する音韻について論ずる場合、頭韻のように語頭が同じ子音で始まるペアが挙げられるが、

168rR3-4 discencion and diuision

上の例の類は枚挙にいとまがない。ただし以下の例のように、

156vR2-3 mercyful and mercy yeuere
157vL24-25 passion and passinge loue
163vL31-32 treuth and trewe byleue

単語同士の組み合わせでないものについては、意味あるいは形態よりも、頭韻的なものになるように特に音韻を重視して形成されたペアではないかと思われる。

同意語的でないペア

これまでに挙げた例の中にもすでに含まれているが、同意語・類義語が組み合わせられたもの以外に

も、頻度等を考慮してペアワードの一環として扱うべきだと考えられるものがある。また、後述する現代英語に通じるようなペアの多くは同意語的でない。

ペアワードを、同意語からなるものに限らず、修辞法の用語で言えば堤喩法・換喩法にあるような語句同士の関係を持つものにも広げて分類するという考え方は、すでに Koskenniemi 等に見られる。すなわち、一方の意味内容がもう一方に含まれているものや、ある一連の過程のそれぞれの局面を指す語等が組み合わされたペアである。

以下の例は、キリスト教の7つの秘跡のうち、Penance¹²⁾（告解、ゆるし）についてのものである。

164rL8-9	contricion and confession
164vR5-6	penaunce and dewe satisfaccion
165vR23-24	contricion and confession

ここに見られるのは、penance とそこに含まれる satisfaction、のペアと、それぞれが penance の構成要素である contrition と confession のペアである。

別の堤喩・換喩的なペアの例として、片方が特殊な状況に基づく語で、もう片方が一般的な語という、互いの単語の言い表す意味の範囲に隔たりがあると思われる「死」に関するペアも挙げておく。

157vL16	passion and deth
166rL28-29	drowned and dede

この項では宗教用語の例が多くなったが、特に最後の例など、一般的な語についても、堤喩・換喩的なペア表現が広く用いられていたことを示すと思われる。

現代英語にも通じるペア

これらを「慣用的な表現であった」とするか、あるいはその後の経緯により慣用的と捉えられるのかは意見が分かれるところであろうし、個別のペアの通時的な考察を経た上でなければ断言できないが、いずれにせよ sacrament の章にも現代英語に通じるようなペア表現がいくつか見られる。これらの多くは、前述した Malkiel がその考察の対象としたものと同種の表現である。以下のようなものを例として挙げることができよう。

- “ flessh and blode ” (flesh and blood) 8 例 (157rR29, 157vL11-12, 159vR6, 160rL2-3, 163vL18, 164rL20-21, 164rL33-34, 167rR31)
- “ bodye and saule ” (body and soul) 3 例 (164rL12, 169vR26, 170rL24-25)
- “ vp and doun ” (up and down) 1 例 (166rR20)
- “ both for the quik and for the dede ” (quick and dead) 1 例 (166vR22-23)

また 3 例見られた “ brede and wyne ” (bread and wine) も、聖餐について多くが語られる sacrament の章の中で持つこの語句の重要性を考慮しつつも、こうした分類に加えることができると思われる

(168rR25-26, 168vL5-6, 168vL10)

個別のペアについての考察

以下、 sacrament の章において特徴的、あるいは全般的なペアワード研究の中で重要性を持つと思われるいくつかのペアを挙げておきたい。

“merveilles and miracles”

160vL15-16	merveilles and miracles
160vL24	miracles and merveilles
160vR13-14	merveilles and myracles
160vR26	miracles and merveilles
162rR13-14	miracles and Merveilles
163rL30	myracles and merveilles
164vR17-18	myracles and merveilles
165rR10-11	miracles and merveilles
165rR20-21	myracles and merveilles
166vL21-22	miracles and merveilles
167rL21	merveilles and miracles
167rR11-12	mervailles and miracles
167vL20	merveilles and miracles
168rL28-29	merveilles and myracles
168vR12	mervailles and miracles
168vR17	merveilles and myracles
168vR27-28	merveilles and myracles
169rR8-9	merveilles and miracles

sacrament の章の中で確認できたものの中では、最も多い18例を数えるペアである。166vL21-22 の例と 167rL21 の例の間にあるもの、序盤の例を別にしてほぼその辺りを境に語順が転換された原因については、現時点では明確な説明をすることができない。

どちらも m で始まる語でもあり、上述のように語順が固定されている訳ではないが、2つの語が非常に強い結びつきをもって用いられたペアであるとは言える。

“ansuerde and tolde”

answered and said 等の表現は、その源は聖書のヘブライ語法の英語への翻訳に起因することが指摘されており¹³⁾、このような宗教的な内容のテキストに多く見られるものである。

sacrament の章にも同様の表現を1例のみだが見ることができる。

166rR16-17	ansuerde and tolde
------------	--------------------

“god and holy church”

158vL9	god and holy church
159rL19-20	to god and to holy church
159rL34-R1	god & holy chirche

これはもちろん同意語が結び付けられたペアではない。むしろ「同意語にしたい語を結び付けたペア」とでも呼べるのではないだろうか。

あくまで推測の域を出ないが、ここには、「神」と「教会」の間には相違はない（両者の考えは常に一致するものである）と周知させようとするカトリック教会側の意図が見え隠れするようにも思われる。 sacramentの章の中だけでも4箇所（168rR1-2, 168vL18-19, 168vR1, 169rL22）で名指しで非難されている“lollardes”（ロラード派）をはじめとする「異端」の活動により、カトリック教会が常に神と信者の間に介在する構図が脅かされると危機感を感じていたとするならば、そうした状況の中で「神」と「教会」を並べて言い表す表現に、何も意味がなかったとは思えない。

関連の表現として、「教会」と「真の信心」を並べた以下の2例がある。

167vL5-7	to trewe bileue & to the doctrine of holy chirche
168vR18-20	holy chirche and the trewe byleue

“bodely wittes and kyndely reson”

158vL11-13	bodely wittes and kyndely reson
160rR19-20	kindely reson and our bodely wittes
167vL2-3	her owne witte and kindely reson

いずれも否定的な文脈で、聖体、聖餐のパンや秘跡を知性によって捉えることを非難するために用いられている。語句を重ねることにより、重ねて否定する、厳しく戒める態度を表現したと推測される。

なお167rL32-R1に、

her owne wisdom and kyndely reson and the principales of Philosophie

という箇所があり、こちらは reson と (witte[s] でなく) wisdom とが組み合わせられたペアとして捉えることもできる。“bodely wittes and kyndely reson”と比較することによってペアワードの意味内容や語彙等についてより深く考察する手がかりともなるが、Sargent では該当箇所は以下のように wisdom (およびそれに続く and) が見られない。

hir owne kyndely reson, & 7e principales of philosophy¹⁴⁾

早稲田写本に至るまでの過程で、何らかの原因、ことによると単なる写字生の書き間違い・記憶違い等のため *wisdome* が加筆されたものと推測される。

このように、当該の例では意味内容以外の要素が絡んでいるため、純粹に語の意味やその関係を検証していくことが困難である。*wisdom* 等も含めたこれららの語について、今後 sacrament の章のみならず早稲田写本全体や他の数々の写本群にあたり、慎重に検討したい。

今回は29ページと短い sacrament の章に限ってペアワードを抽出し、その諸相について論じたのだが、そこに現われたペアの数は決して少なくない。その種類についても音韻・語源・歴史等掘り下げるべきペア、中世英語全般に通じると思われるペア等も含まれ、また意味の面から見ても様々な理由で同意語的なペアワードの捉え方では割り切れない例も見られた。こうしたことは、ペアワードという表現技法の奥深さの一端を示すものであり、ペアワードという表現技法が中世の著述あるいはその根源たる思想の中に深く根ざしたものであるという可能性を窺わせるものである。

今後は、すでに考察した金曜日の章、この sacrament の章をも含め、早稲田写本全体を通じたペアワードの考察ができるよう検証を続け、まずは作品内、ひいては中世英語全般において、ペアワード表現が持つ機能や役割の理解に繋がるよう研究を進めていきたい。

注

- 1) 青木繁博「ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』考察 1. 早稲田写本におけるペアワード - 「金曜日」の章」文芸言語文献学会JALLP 96、1996年、8-19ページ。
- 2) Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 1958, pp.209-220.
- 3) 渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」英語青年 Vol. CXL. No.6 (1994年9月号) 285-287ページ。
- 4) Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- 5) Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.
- 6) Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom, Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975, pp.212-218.
- 7) Koskenniemi, Inna. "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology Presented to Y. M. Biese*. Ed. Yrjo Blomstedt, Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 1983, pp.77-84.
- 8) Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 1959, pp.113-160.
- 9) 横棒で消され、次の行の頭で改めて "and" と記されている。
- 10) ¶: パラグラフマーク。
- 11) Sargent (Sargent, Michael G., ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*. New York: Garland, 1992.) との比較においても、早稲田写本との間で & が使われている箇所は異なる。
- 12) *OED* (CD-ROM Version 3.0) によると、"penance, n. † 1. b." に "In the Roman and Greek Churches, reckoned as one of the seven sacraments, and as including contrition, confession, satisfaction, and absolution." とある。
- 13) 橋本功『聖書の英語 - 旧約原典からみた』英潮社、1995年。関連した表現について論じられているのは 113-116ページおよび208-211ページ。
- 14) Sargent (前掲), p.237, ll.24-25.

< 「 sacrament」の章におけるペアワード >

156v		158v	
L16	hiest and most worthy	L1-2	to receyve and helthfully to ete
L34-R1	sentence and vnderstandinge	L9	god and holy chirch
R2-3	merciful and mercy yeuere	L11-13	bodely wittes and kyndely reson
R23-25	(this goostly mete) yeueth and hathe made	L31-32	heresie and erreure and all othere
R31	merveilous and blessed	R30-32	the souereyne goodnesse and the lawe of god
R34-157rL1	merveilous and glorious	R34-159rL1	techeth & bileueth
157r		159r	
L3-4	werkes & dedis	L7-8	the techinge and the bileue
L15-16	verrely and in that self body	L19-20	to god and to holy chirch
L25-26	werkes and dedes	L25-26	his loue and souereyn goodnesse
L34	in spirit and in herte	L34-R1	god & holy chirche
R4-5	goostly mete and sacramentale commemoracion	R15-16	god and his blessed bodye
R7	verrely and bodely	R32-33	considere and inwardly biholde
R11-12	god and man	R34	kyndelinge & norshinge
R29	fleshe and blode	159v	
157v		L6-7	make ⁷ and worcheth
L8-9	made and ordeyned	R6	flessh and blode
L9-10	souereyne and most worshipful	R11	wellis and waters (of Egipt)
L11-12	flessh and blode	R31-32	verrely and hoolly
L16	passion and deth	160r	
L22-23	souereyn and most worthi	L2-3	flessh and blode
L24-25	passion and passinge loue	L23-24	fully and holy
L33-34	sauoure and taast	R3-4	broken & departed
R4	drawe and kept	R15-16	goostly comfort and helth of soule
R5-6	comforted and strengthed	R19-20	kindely reson and our bodely wittes
R8-9	of vertues and of grace	R22-23	gret folye & goostly perile
R19-20	memorial and precious	R34	thenk and fele
158r		160v	
L5-6	leuyng and eschewinge	L5-6	trowe and fulli byleue
L28	likinge and wonderful	L15-16	merveilles and miracles
R13-15	wikkednesse and vndisposinge	L24	miracles and merveilles
R15-16	taken it and eten it	R2-3	conuerte and turne
R17-18	goostely deth and euerlastinge dampnacion	R9-10	bodely meschief and goostly

R13-14	merveilles and myracles	L13-14	goostly blynde & seke in the feith
R26	miracles and merveilles	L18	trete and receyue
161r		L20-21	flessh and blode
R23-24	grete and so worthi a sight	L33-34	flessh and blode
161v		R8-9	made / treted and receyued
L11-13	souereyne loye and gostly likinge	R10-11	foule and abhomyneable
L20-21	swete teeres and inward sighingges	R27-29	astonyed & abasshed and welnere out of my witte
L25-26	charge the & preie the	164v	
L34-R1	veyn glorie and pride	L7-9	the forme and the sothnesse
R5-6	let and distroye	R5-6	penaunce and dewe satisfaccion
R15-16	the biddinge and the heste	R6-7	assoilled me and lete me go
162r		R9-10	publissed and knowen
L8-9	ordere and manere	R17-18	myracles and merveilles
L25-26	so grete a tresoure and worthi myracle	165r	
L33-34	poblissed and knowen	L14-15	hoolly and fully
R8-9	confermed & strengthed	R1-2	vnderstode and holden
R13-14	miracles and Merveilles	R10-11	miracles and merveilles
R34-162vL1	herde and seghe	R14-16	stableth hem and strengthes hem
162v		R20-21	myracles and merveilles
R7-8	hye deuocion and feruent loue	R27-28	bodely meschief and goostly
R24-25	helth and saluacion	165v	
163r		L16-17	fettres and bondes
L30	myracles and merveilles	L27	loused and vndone
R19-20	consecrate and made god	L29-31	vnderstode wel and had knowinge
163v		R6-8	(consideracion) taketh and gadereth (into youre mynde)
L18	flessh and blode	R23-24	contricion and confession
L29-30	comuned and more stifly sette in (次のペアに続く)	166r	
L31-32	treuth and trewe byleue	L28-29	drowned and dede
R2-3	autour and worcher	R11	glad and loiful
164r		R16-17	ansuerde and tolde
L2-3	temptacions and stiringe	R20	vp and doun
L8-9	contricion and confession	166v	
L12	body and saule	L6	taken and broght
		L21-22	miracles and merveilles

L26	helpinge and sauynge	R10-11	his gret clergye and konynge
L31-32	lowsinge and vnbyndynge		of Philosophie
L33-34	the fire and the peyn (of purgatory)	R25-26	brede and wyne
R9-10	relesed and deliuered	168v	
R19-20	passinge profit and vertue	L5-6	brede and wyne
R22-23	both for the quik and for the dede	L10	brede and wyne
R25-26	singularly and souereynly	L19-20	repreued it and scorned it
		R12	mervailles and miracles
		R17	merveilles and myracles
167r		R18-20	holy chirche and the trewe
L16-18	makeinge and yeuynge (of this most precious goostly mete)		byleue
		R27-28	merveilles and myracles
L21	merveilles and miracles	R32-33	strenght vs and stable vs
L24-25	priuely and wonderfullye		
L25-26	worcheth and voucheth sauf	169r	
L27-28	trewe byleue and loue	R8-9	merveilles and miracles
L29	loue and drede	R9-10	writen and preched
L32-R1	her owne wisdom and kyndely reson and the principales of Philosophie	R21-23	conclusion and moste special mynde
		R25-26	comforte and helpe
R11-12	mervailles and miracles	R28-29	temptacions and ouer sette
R31	flessh and blode		
R34-167vL1	trewe mekenesse and loue drede	169v	
		L17-18	temptacions and ouercomynge
		L19-21	getinge of vertues & encrees of feruour affeccions
167v			
L2-3	her owne witte and kindly reson	R17-18	benygnely and graciously
		R26	bodye and saule
L5-7	to trewe bileue & to the doctrine of holy chirche	R34-170rL1	souereyn mercye and endeless godenesse
L20	merveilles and miracles		
L30	shewe and worch (次のペアに続く)	170r	
		L24-25	bodye and saule
L31-32	gret signes and wondres	L31-32	knyt and loyned
R6	tormentes and peynes	R12-13	correct and amende
R10-11	tormentes and peynes	R14-15	werkes and dedys
R14-15	think and haue in mynde	R16-18	My witte and myne vnderstandynge
R29-30	signes and merveilles		
R34-168rL1	hard and sharpe	R24-25	conforted & strengthed
168r		170v	
L28-29	merveilles and myracles	L1-2	vertue and grace
R3-4	discencion and diuision	L10-11	helpe and comfort

